

日本文化理解を促す外国語教育の実践 —CLILにおける4つのC達成に関する評価—

奥西 有理

岡山理科大学教育学部中等教育学科

(2018年10月22日受付 2019年2月6日受理)

1. はじめに

高等教育の国際化が謳われるようになって久しい。英語教育改革は、国際化対応の中心的課題と位置づけられ取り組まれてきた。文部科学省(2014)は、英語教育改革の背景には急速に進展するグローバル化があるとし、「将来の職業的・社会的な環境を考えると、外国語、特に英語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定」されるとした上で、豊かな語学力とコミュニケーション能力を持ち、異文化理解の精神を身に付けて主体的・積極的に様々な分野で活躍することができるという人材像を打ち出している。その上で、国際コミュニケーションにおいては、英語の習得だけでは十分でなく、「日本人としての歴史・文化等の教養」を持って自ら発信できることが必要であるとしている。

英語による日本文化の発信については、これまで中等教育段階の検定教科書や大学英語テキストにおいて多く取り上げられてきた。日本食(Food)、服装(Fashion)、祭りや伝統行事(Festival)といった3つのFを中心に、海外の人との国際交流において必要となる日本固有の文化的情報の発信が意図されてきた。但し日本の外国語教育における自文化の発信は、伝統文化や目に見える習慣・生活様式が中心であり、特に中等教育の検定教科書においては、アート作品や伝統芸能の紹介にとどまりがちである(奥西・木村, 2017)。異文化間の対人接触が社交レベルの国際交流にとどまらず、仕事や勉学等を共に行うといった、より日常的でより緊密な関わり合いを生む場合は、日本人特有の価値観や考え方、行動のパターンが、外国人にとっては分かりづらいため誤解を招きやすいことを、先行研究によって指摘してきた(奥西・田中, 2008; 奥西・田中, 2009)。日本人にとっては自明の理であり普段あまり意識することのない自らの価値観や行動様式についても、その背景事情や成り立ちにまで気づきを深めておき、文化背景の異なる人々に説明できることは、異文化間の対人接触を通じた相互理解が実現されていくことにつながっていくと考えられる。このようなコミュニケーションの営みが実践されるなら、日本文化の世界への発信はより効果的に実現されていくことになるだろう。不可視的な文化の側面にまで理解を深める試みは、日本の外国語教育においても必要な視点であるといえるだろう。自国文化の独自性の本質を理解し他の文化圏の人々に発信できるスキルを獲得させることは、外国語教育における有意義な取り組みとして位置づけることができるであろう。

では、外国人を日本理解に導くことにつながるような文化への深い気づきは、どうすれば可能となるであろうか。異文化間コミュニケーション分野における一般的な方法として、他文化との比較による自文化相対化の試みがある。中でもアメリカ文化との相対

化において日本文化を理解しようとする試みが、最も一般的なやり方であったといえる。例えば、アメリカ人と日本人がコミュニケーションを取る際、場の状況や文脈に依存する度合いを比較し、低コンテキスト文化 vs. 高コンテキスト文化という理論的枠組みに当てはめて理解するという方法である (Hall, 1977)。このように対比的な価値観や行動上の特徴が理論の枠組みとして存在する場合は、それに基づいて自らの文化的行動の特徴を整理して捉えることができる。しかしながら、すべての文化的行動やその背後に存在する価値観が、理論として確立されているわけではない。また現実の異文化接触は、アメリカなどの欧米文化との間だけでなく、英語圏以外の多様な文化圏の人々との間でも頻繁に起こるため、単純な相対化が困難な場合も多い。東アジア文化やイスラム文化等、多様な文化との関連性や異同の中で日本文化を位置づけて理解し、説明できるような文化間の調整能力の育成が求められるようになってきている (奥西, 2017)。本教育実践では、多様な文化圏出身者に対して、日本人の考え方や行動上の特徴について、その歴史的背景まで理解して英語で説明できるようになることを最終ゴールに据えた。

2. 授業実践の目的—孔子哲学の理解から現代日本文化への気づきを導く

本教育実践では、儒教の最も基本的な哲学である「孝」について考えることから、現代日本人の考え方や行動様式について気づきをもたらしていくことを目的とし、授業を考案した。庶民に開かれた学校としては世界最古といわれる岡山県備前市の旧閑谷学校を外国人短期留学生と共に訪問するというフィールドワークに先立ち、事前学習として2回の授業を実施した。備前岡山藩初代藩主の池田光政が、理想の政治を実現するために、閑谷学校を「孔子の教えを学ぶ場」と位置づけて庶民への教育を施したことに鑑み、「孔子の教え」からスタートして「国の統治」や「教育」にまで視野を広げて考えることができるようになることを目指した。孔子哲学の基本的な考え方の一つは「孝」であり、その核心となるものは、子から親への親孝行であると考えられていたこと、様々な人間関係には優劣関係があると考えられていたこと、法律ではなく道徳こそがよりよい人間社会づくりに貢献すると考えられていたこと、儒教の考え方が当時の社会や人々を統治することと密接なつながりを持っていたこと等について、受講者相互の意見交換を通じて気づきを促していくことが意図された。この孔子の哲学に基づく価値観は現代日本の家族や社会、そして学校においても受け継がれ、日本文化の一部になっている面があると捉えることができる一方で、現代日本においては変容を遂げてしまっている面もあると考えられる。孔子哲学の現代社会への影響や有用性についてクリティカルに考えて自らの意見を形成することで、現代日本人の行動や価値観、そして学校教育や社会のあり方について、より深く捉えることができるようになることを目指した。

授業の実施にあたっては、CLIL (Content Language Integrated Learning, 内容言語統合型学習) のカリキュラムデザインのフレームワークを用いた。CLILの基本原理や本実践のカリキュラム構築の概要については、岡山理科大学教育実践研究第1号に記載されている (前川・奥西・丸山・オハロラン・高嶋・濱谷・柳, 2018)。外国語教育の授業が、CLILとなるためには4つのC、すなわちContent (教科内容)、Communication (言語コミュニケーション)、Cognition (思考)、Community/Culture (協学/異文化理解)が必要となる (池田, 2015)。2つ目のCであるCommunicationは、Coyle, Hood & Marsh (2010)の見解を解釈し

た池田（2015）によると、言語知識（語彙、文法、発音）の獲得や4技能（読む、書く、聞く、話す）の訓練といった語学学習と、対人コミュニケーションツールとしての言語使用の両方を指し、後者の言語使用に重点を置きつつも、両者を有機的に組み合わせていくことであるという。Communication から言語習得を実現するためには、文字や音声から内容情報を得た上でディスカッションを行ったり、発展的テーマで小論文を書くといった活動を通して学習者の言語生成を促したりしていく必要がある。本研究では、1 つ目のC(=Content)および2 つ目のC(=Communication)に関して、学習者の英語によるスピーチデータおよび日本語による自由記述データを基に教育実践の評価を試みる。特にスピーチデータからは、言語習得を促すような Communication が成立していたか、自由記述データからは日本文化理解を促すような Content の学習が行われていたかについて検証する。これらの分析を通して、3 つ目のC(=Cognition)や4 つ目のC(=Community/Culture)が実現していたかについても、併せて検討していく。

3. 授業実践評価の方法

2017年の7月と8月に、15名の学生を対象としてワークショップ形式の授業を2度実施した。参加した学生に対して、教育・研究目的での使用とプライバシー配慮について説明した上で、ビデオ撮影を行った。グループディスカッションは、1グループ4名程度のグループで行われ、授業者に加えて2名の教員が適宜、ディスカッションのサポートに入った。学生に提示されたディスカッションのテーマについて、表1に示した。その邦訳についても表1内に括弧書きで示した。

表1 ディスカッション・テーマ一覧

Q1. Suppose you are the leader of a county. When there are lots of fights and wars there, what would you do to create order and harmony? (あなたが一国のリーダーであると仮定してください。そこでは、争いごとや戦争が多く起こっています。秩序と調和を創造するために、あなたは何をしますか。)
Q2. Confucius thought people have to be more loyal to their parents than anybody else. Even more loyal to than their government in order to create order and harmony in society. Why? (孔子は、人は自分の親に他の誰に対してよりも忠誠心を持たなくてはならないと考えていました。社会に秩序と調和を創造するためには、政府に対してよりも更に両親に対して忠誠心を持たなくてはならないのです。なぜでしょうか。)
Q3. -1. What does “filial piety” mean to you? What do you think of “filial piety”? (あなたにとって、“親孝行”とは何ですか。“親孝行”についてどう思っていますか。) -2. If you do not respect your parents, what problems may happen? (もし、自分の親を尊敬していなければ、どんな問題が起こりそうですか。) -3. If one knows how to respect one’s parents, what would they do to other people in society? (もし人が自分の親への尊敬の仕方を知っているなら、社会の他の人に対してどんな事をしようですか。)

グループディスカッション Q1 の後に行われたグループの代表者による発表については、

音声データを逐語的に文字起こしし、評価の対象とした(表2)。ディスカッション・テーマ Q2 と Q3 に関しては、撮影機器に不具合が生じ音声データの取得ができなかった。しかし、Q1 と Q2 の間に実施した、人間関係の優劣を儒教思想に基づき superior to, inferior to という英語表現を用いて説明するというグループワークの終了後の代表者スピーチについては文字起こしを行い、これについても分析の対象とした(表3)。受講者には、データを研究目的で使用する可能性があることについて説明し、それを望まない場合は申し出るよう伝えた。

第1回目および第2回目の授業終了後に記載を求めた、習得した学習内容に関する自由記述は、英語で実施した授業を通じてどの程度深い内容理解に達することができているのかの質的分析をするために用いた。同様の趣旨の回答をまとめてカテゴリへと整理し、タイトルを付した(表4)。

4. 結果

4-1. ディスカッション Q1: 秩序と調和の創造方法に関するプレゼンテーション

第1回目の授業では、まず Q1 に関して、4つのグループに分かれて10分程度英語で話し合わせ、その後、各グループからの1名の代表者が話し合いを基に発表するという手順を取った。4つのグループそれぞれの代表者による発表内容を表2に示す。

表2 秩序と調和を創造する方法に関する発表内容

Group 1	I think that we have to make a rules of solution. And we have to discuss each country, and understand each other.
Group 2	I think defeat everyone who is against me is a great idea.
Group 3	At first, we should enact constitution to create order and harmony because leader is very good but it has a bad aspect so people is blind so human behaviors become * .
Group 4	We hold meetings and make a law.

※録音データから聞き取れなかった単語については*で示している。

各グループの発表は、どれも比較的短い。争いごとのある社会に秩序や調和をもたらす方法として、学生たちが話し合いの結果出した結論は、憲法や法律等の決まりを作ること、そして話し合うこと、という現代民主主義社会の常識的な価値観に基づく方法であった(Group1, Group 2, Group 4)。但し、Group 2は、話し合いの結果、良い案が得られなかったため、代表者の学生が冗談として、「自分に逆らう者はやっつけるのが良い考えだと思う。」と発表した。発表は、一文か二文から成っており、言語習得を促す Communication となるために十分な量の言語生成があったとは考えにくい。

4-2. 儒教における人間関係の優劣に関するプレゼンテーション

前掲の社会に秩序や調和を創造する方法に関して、受講生は自らが属する現代社会における発想に基づいた価値判断を行ったのではないかというフィードバックが授業者により行われた。その後、社会に秩序や調和をもたらす方法として、憲法や法律といった「ルー

ル」以外に、「道徳」という選択肢があることが示された。儒教では、高い道徳心を持った人間の育成こそが、秩序と調和を創造する最善の方法であると考えられていたことが英語で説明された。次に、その道徳心に関する中心的な考え方の一つである、「5つの人間関係」に関して、儒教の考え方を推測させる課題が与えられた。今回は、グループでの話し合いがより潤滑に行われるように、優劣を表す際使用できる英語表現、superior to~, inferior to~がパワーポイントのビジュアル教材を用いて説明された。人間同士の関係性の優劣に関して、これらの英語表現を使いながら説明するという作業を通して、国づくりや道徳に関して学習者に気づきをもたらされたり、思考が深められたりすることが期待された。各グループには、統治者-臣民、父-息子、夫-妻、兄-弟、友達-友達という5ペアのロールカードが1セットずつ配られた。これらのカードをグループ内で議論しながら模造紙上に自由に配置し、各自が関係性の説明をするよう指示がなされた。

グループでの作業の後、各グループの代表者による発表が行われた。発表内容は表3に示した。どのグループでも、対となる人間の役割間の優劣関係が正しく解釈されていたが、その理由付けにはバリエーションがみられた。但し、人間同士の優劣関係を基盤とした人間社会や道徳に関して発展的に議論を展開できたグループはなかった。

このグループワークにおける発話量は、前掲 Q1. の発話に比べて増加していた。話し合いを促進するツールとしてロールカードや役立つ英語表現があらかじめ提供されていたこと、話し合う内容の抽象度が高くはなく、より身近で具体的なものであったことから話し合いが比較的容易に進んだことがうかがえた。発話量の観点からは、CLIL の Communication を促進するに十分なグループワークが行われていたと認めることができよう。

表3 関係性の優劣の説明に関する発表内容

Group 1	Father superior to son, because father is son' s * . Husband is superior to wife. We decided by gender. Elder brother superior to younger brother. Because elder brother is old. Friends relationship is equal. Ruler superior to subjects.
Group 2	Husband is superior. Wife is inferior. It' s maybe, it' s may be, relationship is old custom. But still there is relationship now. Difference of age is so important point in family rules. It is natural son should follow his parents. Ruler is the country' s top. Subject absolutely should follow ruler. Friend, this relationship is equal.
Group 3	Superior left, inferior right. Husband and wife is separate by gender. And friend and friend this friend equal. This one is *. So, separate by gender. So two gender separate by gender. Older brother and younger brother is separated by old. Father and son is by old and family relationship. A ruler is who father * subject is subjected by ruler. So, ruler and subject is separate by *.
Group 4	I think husband is superior to wife because in many household, it' s husbands in superior position. Father is superior to son because in many times father scolds son when son has accident. Elder brother is often taught moral and study. Younger brother is taught ethics by elder brother. Ruler is superior to subject. So ruler is the highest.

※録音データから聞き取れなかった単語については*で示している。

4-3. 授業によって習得された内容—授業後の自由記述から

グループ代表者による英語プレゼンテーションのデータのみからは、英語の運用能力とは別の次元で学習者が儒教の基本哲学やその社会への影響等の授業内容について理解できていたのかをうかがい知ることは困難である。そこで、英語を学習の手段として用いた本授業の受講を通して学生がどのような内容を習得したのかを確かめるため、第1回目と第2回目の授業終了後、授業を通じて習得した内容について日本語による自由記述を求めた。学びの種類別に分類し、タイトルを付けて表4に示した。

表4 受講者により習得が認識された学習内容

第1回目授業終了後
<p><儒教の日本文化への影響> ・戦国時代から続いていた教えも大きく変化はしているが、<u>基盤はさほど変わっていない</u>などと思いました。・孔子の<u>行ってきたことやそれが今にどう影響しているのか</u>ということ深く理解しました。・<u>今も昔も根本にある重要な教えは変化していない</u>。・<u>改めて家庭内の関係を見てみたりすると未だ男性が強い</u>ということに気づく。年齢はどこもいっしょかもしれない。・今回の授業を受けて、やはり<u>日本というのは儒教の教えが根付いている国</u>だと思った。</p> <p><人間関係の優劣性や重要度の違い> ・混乱していた時代の中では統治する必要が常にあり、<u>関係の中で優劣の関係が絶対にあった</u>。一番重要な関係が「父と子」の関係だったと知った。・一度、<u>戦争によって分かり合えない人の関係を戻すために色々なことが必要</u>だと分かった。この世の中は平等ではなく、必ず、<u>優劣が分かれています</u>と再確認できた。授業では友達はイコールだったが、友達の中でも優劣というのは必ずあると思う。・家族の中の、妻と夫、父と息子、先輩と後輩と、関係性が異なることも分かった。だが ruler と subject があまり理解できなかった。・国や家族の間では優劣がある。友達同士では優劣はない。・孔子が一番大事と考えているのは、父と息子の関係であるということ。</p> <p><争いの実事やその原因・解決方法> ・争いというのは、互いの意見の不一致や欲から生まれるものであり、それらは同時に位の上下をも決めたがる。つまりは、身分、性差がなければ争い自体も生まれない。・時代背景をさかのぼって、孔子や戦国時代の頃から他国間の対立が起こっていたことが分かった。・<u>戦争とかがある国には、ルールが必要</u>。</p> <p><英語学習力・英語力> ・難しい英語を言い換えて言い換えて、英語のみを用いて学習する力。単語の意味を修得しながら文章も作った。・最初の単語テストより先生の授業を聞いたので、後からの単語テストの方が意味を理解することができた。・分からない英単語と他の英語を頼り、考えて意味をつかもうとする。逆に、日本語が出てきても、英語で伝えようとしても出来なかったところが課題だと思った。・上下関係について、どちらが上かどちらが下かという表現の仕方を学んだ。・とにかく英語に慣れる必要があると更に思った。</p> <p><その他感想> ・孔子の教えはすごくいいと思う。人格の尊重と孔子の教え。・孔子は荒れている国の人達を調和させるために、考えて行動した人なんだということが分かった。・父親の教えを守れば秩序は保たれるというのは本当か？先生と生徒の関係、親子の関係であれば当てはまるだろうが。</p>
第2回目授業終了後
<p><親孝行に関する学び> ・親孝行について様々な視点で学ぶことができました。親孝行が孔子の教えに取り入れられていることを初めて知りました。・<u>儒教の根幹には、親孝行という当たり前のこと</u>があり</p>

びっくりした。結局、親を大切に出来れば、人として立派になれるという単純なことが、人間にはなかなか出来ないということだと思う。・親との関係作りからその他の人への関係づくりもできていく故であり、しっかりと親を大切にしていくなさだと思った。・親を大切にし尊敬することは大切だということ。・親孝行の大切さ。・親孝行なんて考える年ではないので、今まで考えたことがなかった。「なんで?」「どうなる?」とか聞かれると答えることができなくて、とても悩んだ。・親子の関係を元にして、人間がどのように成長してきたのかを紐解いた。親子間の信頼の有無による社会への影響を考察し意見を交わすことで、重要性を確かめた。・親孝行は昔からある言葉で、社会性の問題と結びついているということが分かった。・日本の教育と儒教のつながりを知ることができた。各家庭が正しい状態にあるならばいさかいなど起こりえないということを理解した。・孔子は親孝行が一番大事だと考えていたこと。・親を尊敬する心が様々な場所で他人を尊敬する心に成長するという考え方が分かった。

<現代日本文化とのつながり> ・先輩・後輩の関係にも影響している。・この教えが江戸時代くらいからずっと日本人の心に染みついて今に至り、日本は親切的な国という認識になったのかなと思う。・親孝行から社会にどのようにつながっていくか、どのような影響があるのか授業で考えた。中国からの教育(道徳)をあまり知らないのに興味を持った。

<道徳と国家統治の関係> ・孔子は法を作るだけでなく、道徳を教えることで戦国時代にもかかわらず国の秩序を保持した。

<教室内コミュニティへの気づき> ・親孝行に対する自分の意見と周りの意見を聞いて、同じ文化でも違った考えの人が多くいるので、一つ一つの家庭によって、その家だけの文化があるのかと思った。・皆もだいたい同じ考えを持っているということを知った。・親孝行がどのように影響するか色んな意見が聞けた。

<英語学習力・英語力> ・New words ・親孝行の意味やそれについてどう思うかを英語で発表できるようになった。・自分のListening力の低さ→夏の課題。・英語で表現した。自分の意見を考える力が少し身に付いた。

<その他感想> ・しかし最近思いやりのない人が増えているのはなぜだろうと思った。・もっと発表を意欲的にすべきだと思った。

表4に示された自由記述データから得られたカテゴリ、〈儒教の日本文化への影響〉〈人間関係の優劣や重要度の違い〉〈争いの事実やその原因・解決方法〉〈親孝行に関する学び〉〈現代日本文化とのつながり〉〈道徳と国家統治の関係〉からは、授業デザイン段階で意図されていた孔子哲学の理解と、これと国の統治や教育との関係、現代日本文化への影響について、学習が成立していたことが分かった。

また第2回目授業後の自由記述データ分類からは、〈教室内コミュニティへの気づき〉というカテゴリが抽出されており、本授業実践を通じてCLILの4つ目のC、Community/Cultureが一部の学生によって体験されていたことが明らかとなった。なお、儒教の基本哲学が、社会のあり方や現代日本文化とのつながりの中で考察されたと認められる記述(=表4の中の該当箇所に下線)が複数あり、授業を通じて受講者の思考が深まるというCLILの3つ目のCも体験されていたことがわかった。

3. まとめ

本論では、2回にわたる授業実践から取得した学習者の英語言語データおよび日本語自

由記述データを基に、どのような学びが行われていたのかについて検証を試みた。第1回目の授業では、ディスカッション・テーマ Q1. に関して、第2回目の授業においては、ディスカッション・テーマ Q2. と Q3. の3つの問いに関して、グループ討論が実施された。学習者は、英語による解説と、討論および発表というプロセスを経て、家族との身近な人間関係が、道徳を基盤とした国作りにつながっていくという思想について理解していった。

受講者による授業内容の理解が進んでいったその一方で、理解していることを英語で表現することにおいては、発話量あるいは表現力の点で十分でなかった。言語習得につながっていくような質を伴った言語生成ができたとは言いがたく、CLILの4つのCの中では、Communicationに課題があると考えられた。CLILの4つのCの中で、内容理解という点においては十分な学びが実現していた可能性があるが、言語生成を伴う発信力に課題があるとすれば、他者との意見交換を通してこそ実現する思考力の深まりや異文化理解にも限界があると考えざるをえない。CLILはContents(内容)とCommunication(言語コミュニケーション)の同時的習得を目指すことに特徴付けられた教育法であるが、日本人学習者にとっては後者の習得の難易度が前者よりも高い可能性が浮かび上がった。日本人学習者の特質に適合させたCLILの実践が検討される必要があるであろう。具体的には、両者の同時的取得が可能となるよう、スピーキングにとどまらないライティングも含めた多様なアウトプットのエクササイズを、授業やホームワークの中に豊富に盛り込んでいくことが考えられる。また、沈黙を金とする日本文化を相対的に捉えさせ、自らの考えを表出することに価値を置く世界の多くの文化との対話のためには、自らの考えを意識化して他者に明示的に伝えることが重要であるという理解に導く教育の実施など、単純な英語学習を超えた教育的試みも効果的であると考えられるだろう。

最後に、日本人学習者を対象としたCLILの実践について本研究から得られた知見には限界があり、一般化のためには今後の実践研究の蓄積が待たれる。CLIL実践による教科内容の習得程度と効果的な英語発信能力の育成、両者のバランスがとれた教育法の開発について、今後も多角的アプローチにより検証が積み重ねられていくことが期待される。

参考文献

- 1) Coyle, D., P. Hood & D. Marsh (2010). CLIL: Content and language integrated learning. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2) Hall, E. T (1977). Beyond Culture, Anchor.
- 3) 池田真・渡部良典・和泉伸一(2015). CLIL(内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 上智大学出版
- 4) 前川洋子・奥西有理・丸山糸美・オハロランジェーン・高嶋恵三・濱谷義弘・柳貴久男(2018). アカデミック英語能力習得を可能にする内容言語統合型教育の実践: 4つのCに基づいたCLILカリキュラムの構築 岡山理科大学教育実践研究1, 155-164.
- 5) 文部科学省(2014). 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm (2018年10月20日)
- 6) 奥西有理(2017). 国際キャリアに就く中国系人材の日中文化認知と調整 移民政策研究9, 74-87.

- 7) 奥西有理・木村淳子(2017). 中等英語教育における異文化理解教育実施可能性の検討：検定教科書における文化多様性とグローバルイシューに関する分析 岡山理科大学紀要 53B, 127-132.
- 8) 奥西有理・田中共子(2008). 日本人ホスト学生による文化的サポート：留学生の異文化適応に関する支援的役割の検討, 多文化関係学 5, 1-16.
- 9) 奥西有理・田中共子(2009). 多文化環境下における日本人大学生の異文化葛藤への対応：AUC-GS 学習モデルに基づく類型の探索, 多文化関係学 6, 53-68.

謝辞

本教育実践の事前準備段階において、岡山理科大学教育学部の山中芳和先生と奥野新太郎先生に専門的立場から、江戸時代の教育や儒教哲学等についてご教示いただきました。また授業実践に際しては、岡山理科大学教養教育センターの丸山糸美先生、ジェーン・オハロラン先生、前川洋子先生に有益なアドバイスとご支援をいただきました。心よりお礼申し上げます。

なお、この研究は岡山理科大学教育改革推進事業の助成によって行われました。